

# 生きてはたらく漢字の力をつける 「くりかえし漢字ドリル」の活用

東京都杉並区立杉並第二小学校教諭 飯塚 将史

## 求められている、漢字を「使う」力

国語は、すべての教科につながる基礎の教科といわれます。国語の評価観点、「読む」「書く」「話す・聞く」——文を読んだり、自分の思いを書いたり、人の話を聞いたり、人に話したりという技能はどんな教科においても重要だといえます。国語で培った技能を他の教科や社会に出でから生かす、「生きてはたらく国語の力」が、今求められているのです。

その国語の土壌に基礎となる事柄が「言語事項」の習得でしょう。「言語事項」の中で特に漢字の読み書きは、小学校の間に習得すべき漢字数が非常に多いことから、子どもたちにとっては大きな課題となります。そこで、学習指導要領では漢字の学習についてのようにならぶられているかどうかと、

1年…：配当されている漢字を読み、漸次書くようにする。  
2年以上…：当該学年に配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書くようにする。

とになっています。学習指導要領も漢字を「使う」ことをねらいとして設定しているといえるでしょう。

## なぜ「くりかえし漢字ドリル」を使うのか

漢字の習得のためによく使われるのが「くりかえし漢字ドリル」だと思います。最近書き込み式のドリルが販売され、よく使われているようですが、私は「くりかえし漢字ドリル」の良さをフル活用することで、子ども



たちの努力を無駄にしない、「生きてはたらく漢字の力」がつくと考えています。

では、「くりかえし漢字ドリル」の良さとは何でしょうか。

## ①すべての新出漢字が短文の中で網羅されている。

漢字の力をつけるためにはくりかえし書いて練習し、形を覚えることももちろん重要です。しかし、実際に漢字を使うときに、「文字だけで使うことはまずないでしょう。漢字を文中の単語の一部として使い、使い方を覚えることで、初めて「言語事項」の目標に近づけるわけです。「くりかえし漢字ドリル」では、新出漢字や復習するべき漢字が必ず短文の中で出てきます。これを何度もくりかえし書くことで「正しく漢字を使う力」が自然に身につけてきます。

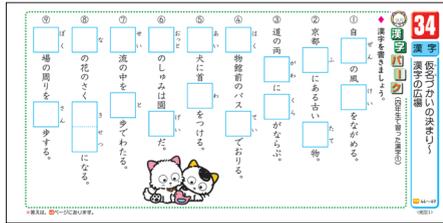
- ① サクラに似た花
  - ② サクラソウの群生が
  - ③ 鳥が群れる。
  - ④ ありが群がる。
- 絶滅が心配される鳥の群

②復習のページがドリルの途中や巻末に出てきている。

漢字に限ったことではありませんが、一度得た知識もしばらく使わないと忘れてしまいがちです。そこで必要なのが復習です。「くりかえし漢字ドリル」には「漢字のまとめ」のページや前学年の漢字を使った書き込み式のミニページがあります。このページを有効活用することで、習った漢字も効果的に復習することができます。

もちろん、新出漢字の練習のページもフルに活用したいところです。

さて、実際に指導するときに、どうしたらこの「くりかえし漢字ドリル」の良さを活用し、子どもに生きてはたらく力をつけさせることができるか、考えてみました。つたない実践例ですが、ご参考までに紹介させていただきます。



「くりかえし漢字ドリル」の学習と指導の進め方

「生きてはたらく漢字の力」をつけるために

**新出漢字の指導**

- ドリル(のページ)を見ながら、新出漢字を家庭で予習させる。
- 国語の時間に、意味や使い方、書き順などをおさえる。

**漢字練習**

- ドリルに出てくる短文ごとに、書き順や送りがなな気をつけながら、ていねいに写させる。

**テスト**

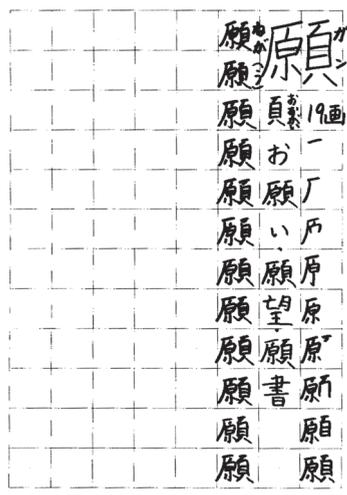
- 定着を図るために、20問(中学年以下は10問)テストを実施。短文ごと書かせる。

**復習**

- 定着度を高めるために、学期の間に1〜2回、まとめのテストを実施する。

新出漢字の指導で留意することは、「漢字が表意文字であり、漢字の部分には意味があること」、また、「その組み合わせによって文字が構成される場合が多いこと」を子どもに認識させることです。

①新出漢字はドリル(のページ)を見ながら家庭学習で予習する。



右の図のように、市販の漢字ノートを使い、3行で一文字を練習します。ノートは12マスのノートが使いやすいです。ドリルの1ページがそのままノートの見開き2ページに練習できます。このとき、新出の漢字は大きく4マスを使って、その両脇に音訓の読み方、下には部首と画数、さらにその下には書き順とその字を使った熟語や言葉を書くなど、ドリルに書いてある情報をノートに正確に写すようにさせます。

②国語の時間に、新出漢字の意味や使い方をおさえる。

毎時間の初めの数分を使って、新出漢字を2〜3字学習します。前の日までに家庭学習してきたノートと「くりかえし漢字ドリル」を見させて、漢字の意味や使い方、書き順、間違えやす

いポイントなどを板書しながら解説すると良いと思います。このとき、私は漢字のへんやつくり、音訓に着目させ、どんな意味がある漢字なのかを話したり、調べてきた子に発表させたりしています。たとえば、「財」という字であれば、「貝」の部分、昔お金として使われた貝を表している、つまりこの漢字はお金に関する漢字であること、「才」は「文字では「サイ」と読むが、「財」という字の一部になると「サイ」と読みが少し変わることを教えます。

また、書き順はひとりでの学習ではなかなか意識できないものです。よく使われている方法ですが、ゆび書き→空書き→なぞり書き→本書きというように、書き順を意識しながら、この時間中に5〜6回は同じ漢字を練習します。

ただ、高学年になると、国語の学習内容が濃密になり、新出漢字の練習に時間を割くことが難しくなってくると思います。この作業は、児童の実態を見ながら徐々に自主学習や家庭学習に移行させて良いと思います。(私は5年の2学期からは家庭学習にさせました。)

- つぎに、漢字練習のさせ方です。ここで私が大事にしていることは、
  - ていねいさにごだわること。
  - 頭に入るまでくりかえし練習すること。
  - 努力した成果をこまめに評価し、励ましていくこと。
- の3点です。

### ③ドリルのページは書き順や送りがない気をつけて、ていねいに写す。

漢字を上手に書けるようになれば、子どもは意外に楽しく練習をしてくるようになります。一文字ずつていねいに、心を込めて書かせるようにします。回数は1問につき2〜3回くりかえし、さらに別の日にそれをもう一度、つまりひとつの問題を最低5〜6回はくりかえして練習させます。高学年であれば、一週間の期間を区切って、その間に5回練習するよう指示し、やり方は子どもに任せてみることにしました。

### ④ドリルの練習が終わったら、漢字テストで励ます。

ドリルの練習をさせたあと、あまり日を置かないうちに漢字テストをします。(前の日や当日、ていねいに練習していれば、子どもはだいたい思い出すことができます。)

ドリルには1ページに20問ありますが、中学年までは1回のテストで10問にしておいた方が覚えやすいようです。高学年は週一回、曜日を決めて20問を一気にテストするの良いと思います。毎週の学習のリズムができれば、自らすすんで学ぶ姿勢もこの漢字練習から作ることが出来ます。テストではドリルに書いてあるすべての漢字や送りがないを採点の対象にします(新出漢字以外も間違えたら×です)。

こうしたことで、新出漢字以外の漢字も、一生懸命練習をさせることができます。20問のテストは、慣れないうちはなかなか100点が取れずにもどかしい思いをする子も出ると思いますが、逆に100点を取ったときのうれしさが増します。(後述しますが、20問を同時にテストすることで、漢字を暗記する力をぐんと伸ばすことができると感じています。10問のテストでは常に100点を目指してがんばらせます。練習してできるようになった子を励ます場にしたいです。)

### ⑤学期の間に1〜2回、「漢字のまとめ」からテストをする。

「漢字のまとめ」のページは、それまでに習った漢字が復習できるようになっています。これも普段のドリルのページと同様、漢字テストの対象とします。普段10問でテストを行っている学級では、20問の中から、漢字テストで間違いの多かった10問をピックアップして出題しても良いと思います。

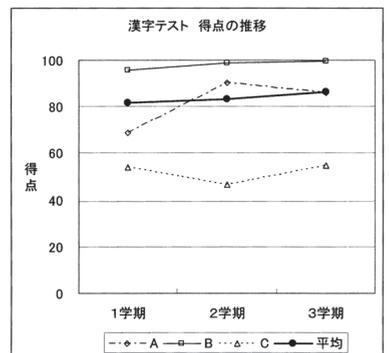


⑥書き込めるページは自分で書き込み、できたら自分で答え合わせをする。

3年生以上になれば、漢字の答え合わせも自分でできるようになると思います。書き込みのページには、前の学年に習った漢字が出てくることが多いですから、もし間違えたら、答えを見ても良いので、自分で直せるぐらいになっほしいと思います。

「くりかえし漢字ドリル」を使って伸びる子どもたち

何度もくりかえし書いたり、テストをしたりするうちに、だいたいの子が着実に漢字の力をつけていきます。すべての子に合っているとは思いませんが、私が昨年一年間、ご紹介した方法で指導した記録（6年生のものです）。から、顕著な子の例をいくつか取り上げたいと思います。ちなみに、6年生になってから、私のクラスでは20問のテストをするようになりました。5年生までは、採点方法は同じですが、問題数は10問にしていました。初めはみな、いきなり2倍に増えた問題の量にとまどいがあり、クラスの平均点は5年生の時より10点ほど下がった時期がありました。



A児は1学期の平均得点は69点でした。しかし、夏休みに自主的に漢字の練習に取り組み、5年生と6年生の1学期配当の漢字を復習できたことで、2学期以降は自分のペースを守って学習を進めていました。その結果、2学期の平均得点は90点、3学期は少し下がったものの86点と、漢字テストの得点も向上しました。

B児は漢字の学習だけでなく、学校での様々な作業をていねいに行う子でした。この学習の方式にもすべになじみ、毎週欠かさずに漢字の練習をくりかえしました。その結果、1学期は96点、2学期は99点、3学期は100点と、力をさらに伸ばすことができました。

C児の場合、なかなか漢字の練習に積極的に取り組もうとしませんでした。まずは最低限の回数を行うことを目標に指導を続けましたが、遅れて提出したり、漢字テストが終わってからその範囲の練習をしたりと、なかなか効率的な

学習ができませんでした。1学期54点に対し、2学期47点、3学期55点と、思ったように成績を伸ばすことができませんでした。節目節目を大切に、A児のように気持ちを切り替えて練習させることができたらもっと力を伸ばせたかもしれないですね。反省しています。

以上のように、全員が力を伸ばせたというわけではありませんが、全体を平均すると、1学期から3学期まで、上昇カーブを描いて卒業させることができ、おおむね納得のいく結果が得られたと思います。これから私自身ひとりでも多くの子に動機づけを行えるようにしていきたいと考えています。

漢字の指導に関しては様々な研究事例もありますし、子どもたちが慣れ親しんだ方法もあると思います。いずれの方法でも大事なことは、漢字を「使う」ことを意識して指導することでしょう。

漢字の指導の時間だけでなく、国語の時間全体、さらにはすべての教科の時間全体を通して、文章の中で正しく漢字を使えるように指導をしていきたいですね。

そして小学校段階では、「自らすすんで学ぶ」姿勢を身につけさせることも重要だと思います。きめ細かい指導と評価で、子どもたちを励まし、力をつけてあげたいと思います。

（22年度までの教材を使った実践例です。）